

特集 記事

オープンフォーラム 震災の伝承と防災の未来～被災 地で向き合う「災害と教育」～

編集委員会 企画・総括 柴山 明寛¹

1. はじめに

本オープンフォーラムは、平成30年度第37回日本自然災害学会学術講演会（平成30年10月6日～8日・仙台市中小企業活性化センター）の最終日、8日の9時15分～12時の間、仙台市中小企業活性化センター多目的ホールにおいて開催された。今回は、本学会、京都大学防災研究所、東北大学災害科学国際研究所、自然災害研究協議会東北地区部会の4者主催のフォーラムとなった。

まず自然災害研究協議会東北地区部会の幹事長であり、本大会実行委員長の風間基樹東北大学教授より開会の挨拶があり、その中で、他主催者である自然災害学会長の寶馨先生（京都大学大学院総合生存学館館長）と、庶務担当常務理事の田中茂信先生（京都大学防災研教授）のご紹介があった。

大会前半では、特別企画として「中高生による防災学習・研究発表」をポスター発表形式で実施し、学校における防災学習の事例を紹介した。また、会場参加者が選者となり優秀な発表に投票する形で、優秀発表賞の選定、閉会時にはこの授与式も行った。

後半は、東北大学災害科学国際研究所の佐藤健教授のコーディネートにより、被災3県の学校現場から、佐藤公治教諭（宮城県南三陸町立歌津小

学校）、吉川武彦氏（福島県相馬飯館村立草野・飯樋・白石小学校長・福島県相馬郡飯館村までの里のこども園長）、森本晋也准教授（岩手大学大学院教育学研究科・地域防災研究センター）を、そして、教育を支援する立場から、大内幸子氏（仙台市地域防災リーダー）、伊勢みゆき氏（NPO法人まなびのたねネットワーク代表理事）、桜井愛子准教授（東洋英和女学院大学）の6名をパネリストにお招きし、『震災の伝承と防災の未来～被災地で向き合う「災害と教育」～』と題したパネルディスカッションが行われた。

2. フォーラムの趣旨

東日本大震災の発生から7年半が経過し、本年は6月の大阪北部地震から始まり、7月・8月の台風災害、9月に入ってから北海道胆振東部地震が発生し、海外においてはインドネシアのスラウェシ地震と、大規模災害発生の非常に顕著な年であった。

東日本大震災の被災地では、学校を中心とした震災伝承の活動や復興教育、防災教育、また福島では放射線教育の実践など、実に多様な取り組みが活発に行われている。しかしその一方で、時間の経過とともに東日本大震災の経験・記憶のない世代が小学校に入学してきており、学校における防災教育は新たな局面も迎えている。学校で実施できる知識習得や訓練のほか、より防災を強化していく過程においては地域と学校の協働が欠かせ

¹ 平成30年度学術講演会実行委員
東北大学災害科学国際研究所
International Research Institute of Disaster Science

ない。社会教育法では地域学校協働活動推進員を委嘱できる法律ができるなど、学校と地域が連携できる体制も次第に整いつつある。本フォーラムでは、災害と教育という観点から、学校という教育現場とそれを支援する側とで、それぞれの防災教育への取り組みの成果と課題を共有し、どのように協働していくことが望ましいのかについて議論が行われた。

3. 中高生による防災学習・研究発表

それではさっそく会を始めさせていただきます。私は全体の司会をさせていただきます、東北大学災害科学国際研究所の佐藤翔輔と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは中高生によります防災学習の研究発表ということで、これより7校10件の研究発表を行います。今日、これからの流れをご説明させていただきます。ただいまより各校1分ずつ、前のステージで「これからこのような発表をします」という紹介をしていただきます。皆さんはそれをご覧になって、どのポスター発表を見に行くかの参考にしてください。その後、皆様には自分が見たいと思ったポスターの前に移動していただきます。各校10分の発表を4セット行いますので、必ずどこか4つのポスターをご覧になっていただけるようお願いいたします。10分が経ちましたら移動をお願いする合図をお出しますので、なるべく多くのポスターをご覧になっていただくようお願いいたします。そして、お手元には小さい紙もあったかと思いますが、そちらが投票用紙になってございます。今日、この会が終わった後、優れたポスターには「優秀発表賞」を授与する予定になっております。この賞は、今日は皆さんに決めていただくことになっております。その紙に該当する番号を書いていただいて、パネルディスカッション中に投票箱を座席にお回しいたしますので、そこに投函いただいて係の者にお渡しください。それでは時間がございませんので早速で恐縮ではございますが、これより各校の1分プレゼンを始めさせていただきますと思います。

▶各校による1分プレゼンテーション

【石巻市立桃生中学校】



人と自然との共生～災害から学ぶ」石巻市立桃生中学校2学年の及川叶翔、小澤菜津月、伊藤心美、高橋陽樹です。よろしくお願いいたします。それでは数字で紹介します。

2000ha：桃生町の水田面積。50戸：桃生町の和牛農家の数、賞を取っている最高級の和牛です。347ha：桃生町の畑の総面積です。5番目：日本で5番目の北上川の流域面積です。3分の2：桃生町が過去に大きな水害にあったときの浸水地域です。

今、紹介したのは桃生町の自然との災害についてです。その中で僕たちは生きています。自然と人との共生を目指してそしてこれからも生きていきます。この続きは10分間の発表です。ぜひ見に来てください。よろしくお願いいたします。

【気仙沼市立階上中学校】

皆さんおはようございます。私たちは、気仙沼市階上中学校から来ました。階上中学校のポスターのテーマは「地域と連携した防災学習」です。階上地区住民への津波避難行動調査から自助を考え、考察をしました。平成28年11月22日に福島沖地震が発生しました。この地震では津波注意報、警報、避難指示が発令されました。発令されたにもかかわらず、地区の避難者が56名と少なかったことに私たちは危機感を抱きました。そのため、私たちは地区住民の皆さんの防災への関心について調査を行いました。この内容について10分間の

発表を今日を行います。今日はよろしくお願ひします。

【宮城県気仙沼高等学校】

皆さんおはようございます。気仙沼高校2年の工藤美月です。気仙沼高校では、3年間を通して課題研究というものを行っています。私は昨年から「森林を利用した街づくり」ということに着目して研究しています。本日は、昨年一年間通して研究した海岸林についての発表と、今年私が研究した内容を発表したいと思ひます。よろしくお願ひします。

【宮城県石巻西高等学校】

こんにちは。石巻西高校、生徒会副会長・小山愛です。同じく生徒会役員防災協働委員の佐藤駿太です。これから、石巻西高校の防災学習について、概要を発表したいと思ひます。よろしくお願ひします。現在スクリーンに映されている画像は、西翔歴、国際フォーラム、防災体験学習の画像の一部です。本校では、こういった活動を中心に防災活動を行なっています。今日は伝え・備えと題し、後ほどポスターを通して西翔歴、国際フォーラム、防災体験学習について皆さんに紹介したいと思ひますのでよろしくお願ひいたします。

【岩手県立釜石高等学校】

皆さんこんにちは。岩手県立釜石高校数学班です。私たちは地元の研究をしたいと考えました。私たちは、このような疑問を抱きました。一つ目は、東日本大震災の当時に、人々はどう逃げたのか。もう一つは、津波にのまれた人と、のまれなかった人にどのような動き方の違いがあったのか。その二つを、数学で考えられないだろうか。そこで私たちは、図形の複雑さを数値化できる『フラクタル次元』という方法を使って研究しようと考えました。今日は5番のポスターで発表していますので、ぜひ来てください。以上です。

【宮城県多賀城高等学校】

皆さんこんにちは。私達は多賀城高校から来ま

した。多賀城高校では、東日本大震災の経験から災害科学科を設置し、災害関係の勉強をしています。災害関係の勉強だけでなく、勉強と行事があります。その行事の中で、浦戸諸島に巡見に行ってきました。生物班と地学班と科学班に分かれて、今回は生物班と化学班の研究を発表しに来ました。是非来てください。

【宮城県仙台二華高等学校】

皆さんおはようございます。仙台二華3年、古泉杏奈です。仙台二華は今回三つのテーマについてポスター発表を行います。まず一つ目がカンボジアにも災害地名はあるのかという内容です。日本において、一目見てどんな災害が起こるかわかる、日本特有の災害地名がカンボジアにも存在すると仮定して行いました。この研究では、現地で使われている地図を用いて、地名を抜き出して行った研究です。次に、大阪市における内水氾濫頻発区域と小中学校の分布です。この研究では、内水氾濫被害額が最も多い大阪をフィールドに、過去の内水氾濫の分布と、小中学校の分布を照らし合わせて行った研究です。最後に、長野県を対象とした、災害をもたらす雨の時間帯分布についての研究です。この研究では、被害を発生させた豪雨に着目し、豪雨の時間帯分布から起こりやすい時間帯を調べたものです。8・9・10の場所でポスター発表を行いますので、ぜひ来てください。

佐藤翔輔：はい、ポスター発表、どれをご覧になるか、参考になりましたでしょうか。それでは、大変恐縮でございますが、A4の紙と投票用紙をお持ちになりました、今の発表を見て、見てみたいと思われたポスターの前にご移動をお願いします。1～2分後に1セット目を開始させていただきますので、どうかご協力のほどよろしくお願ひいたします。

ご移動中にアナウンスさせていただきます。ステージに向かって右側は、特別展示ということで、石巻市で行われたマップコンクールで県庁の特別賞を受賞した防災マップが展示されています。こちらも時間のある時にご覧になっていただければ

と思います。

皆様、ご準備はよろしいでしょうか。はい、それでは1セット目の最初の10分を開始させていただきます。それでは発表を始めてください。

▶各校のポスターと発表概要

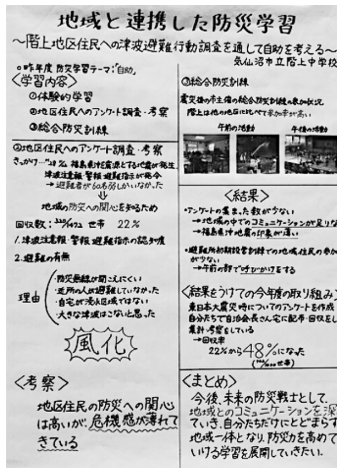
①石巻市立桃生中学校：人と自然との共生～災害から学ぶ～

北上川の昔と今と題し、河川図から過去と現在の災害について考察し、家族から過去の災害について話を聞く、災害を年表から調べるなどして、自分たちの住んでいる地域について理解を深めた。また、24時間前行動タイムラインでの事前防災行動、防災の心得、地域ハザードマップの確認と緊急避難場所の確認など、防災学習の結果をまとめた。



②気仙沼市立階上中学校：地域と連携した防災学習～階上地区住民への津波避難行動調査を通して自助を考える～

H28.11.22の福島県沖を震源とした地震が発生した際、避難指示の発令に伴う地域の避難者が非常に少なかったことから、地域防災への関心度合についてアンケート調査を実施した。アンケートの回収率を高めるための試みからコミュニケーションの重要性も学び、地域と一体で防災力を高める必要性をまとめた。



③宮城県気仙沼高等学校：森林を利用した街づくり

防潮堤と海岸線を併用した防災について研究した。それぞれの持つ特性を活かし合うことで、津波の侵入を防ぎ、漂流物を阻止するほか、海の再生にもつながる。防災林の整備には課題もあり、美しい景観と避難路を兼ねるなど、今後も機能的な街づくりの研究を進めたいとまとめた。



④宮城県石巻西高等学校：伝え・備える～本校の防災学習～

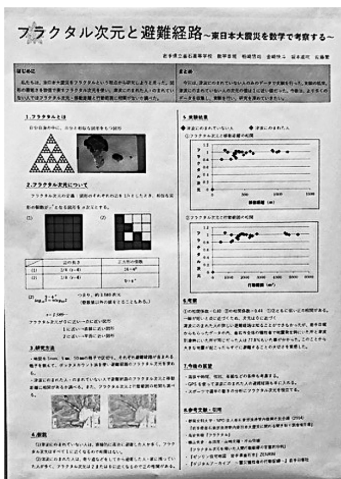
東日本大震災の記憶が薄らぎ、震災を経験しない生徒が入学してくる今後は懸念して実施している。学習と伝承ができる取り組みについてまとめている。西翔歴という独自の暦の作成することで、

防災知識について学び、地域災害の記憶も次世代に伝承することができる。様々な防災学習と、国際交流を通して意見交換するなど、防災学習の効果についてまとめた。



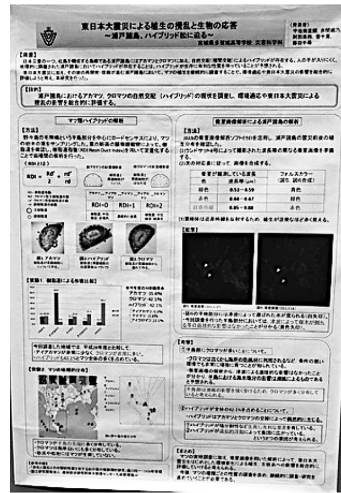
⑤岩手県立釜石高等学校：フラクタル次元と避難経路～東日本大震災を数学で考察する～

東日本大震災において人々はどう逃げたのか。津波にのまれた人、のまれない人の移動距離と行動範囲との相関について、図形の複雑さを数値化できる『フラクタル次元』を用いて表す研究の結果と考察をまとめた。



⑥宮城県多賀城高等学校 A：東日本大震災による植生の攪乱による生物の応答～浦戸諸島、ハイブリッド松に迫る～

浦戸諸島は、アカマツのほか、潮風への耐性が強いクロマツと、偶発的に生じるハイブリッド種が全体の多くを占めていた。これは、塩分耐性など生育に有利な要素・遺伝的浮動によって集団に広がるなどと考察、植生への大震災の影響をまとめている。



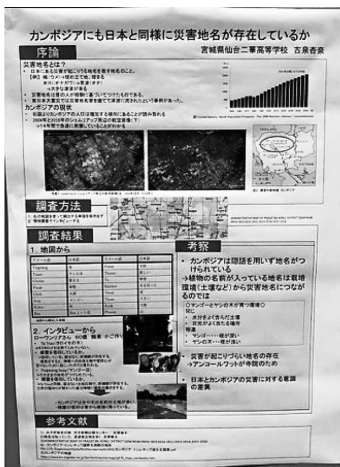
⑦宮城県多賀城高等学校 B：土壌中のアンモニウムイオンの測定

野々島千代崎の人為的な影響の少ない場所をサンプリング場所とし、土壌中のアンモニウムイオン濃度を調べ、周囲の環境が与えた影響(植生、災害)を調査した。場所による窒素化合物の濃度の違いを検証し、各所の土壌の回復度合いをみる事ができたまとめている。



⑧宮城県仙台二華高等学校 A：カンボジアにも日本と同様に災害地名が存在しているか

過去の災害事例から名付けられている日本の「災害地名」は、カンボジアにおいても同様に存在しているかについて研究した。日本のように隠語を使用しないほか、災害に対する考え方に、文化や信仰の影響が見られたことをまとめている。



⑨宮城県仙台二華高等学校 B：大阪市における内水氾濫頻発区域と小・中学校の分布

過去、内水氾濫被害額の最も高かった大阪市において、1970年代、人口の増加にともない、川沿いや、水田が多い郊外にむけて都市の開発が進んだことを原因と仮定し、調査した内容をまとめた。



⑩宮城県仙台二華高等学校 C：長野県を対象とした災害をもたらす雨の時間帯分布

近年、増加している豪雨災害時の避難行動について、住民の防災意識と災害の実際と乖離があるのではないかと考え、災害をもたらす雨の時間帯分布、時間帯分布と住民意識の差について調査した結果についてまとめている。



佐藤翔輔：はい、終了してください。大変お疲れ様でございました。パネルディスカッション中に投票箱をお回しいたしますので、その際に投票をよろしくお願いいたします。発表された生徒さんに拍手をよろしくお願いいたします。

4. パネルディスカッション「震災の伝承と防災の未来～被災地で向き合う災害と教育～」

コーディネーター：

佐藤 健（東北大学災害科学国際研究所・教授）

パネリスト：

佐藤 公治（宮城県南三陸町立歌津中学校・主幹教諭）

吉川 武彦（福島県相馬飯館村立草野・飯樋・白石小学校長／福島県相馬郡飯館村までの里のこども園長）

森本 晋也（岩手大学大学院教育学研究科／地域防災研究センター・准教授）

大内 幸子（仙台市地域防災リーダー）

伊勢みゆき（NPO 法人まなびのたねネットワーク・代表理事）

桜井 愛子（東洋英和女学院大学・准教授）

佐藤健：それでは、後半のパネルディスカッションに入らせていただきます。

オープンフォーラムの全体テーマと同じ「震災の伝承と防災の未来～被災地で向き合う災害と教育～」というテーマで始めてまいります。

まず、私の方から、簡単に趣旨説明させていただきます。先ほどのテーマを掲げさせていただいたわけですが、冒頭、風間先生のお話にもありましたように、東日本大震災の発生から7年半が経過しまして、最近の国内外での自然災害の発生がある中におきましても、先ほどの中学生・高校生の学習成果の発表を見ていただきましたように、東日本大震災の被災地では、学校を中心とした震災伝承の活動や、復興教育、防災教育、それから福島では特に、放射線教育の実践が活発に行われております。その一方で、最近の小学校には、東日本大震災の経験や記憶のない世代が小学校に入ってくるなど、教育の新たな局面も迎えているような状況かと思えます。



そこで、災害と教育という観点から、岩手、宮城、福島、三県の学校現場における、東日本大震災の発生からこれまでの成果と課題について、まずは会場の皆様と共有させていただきたいと。そして、広い意味での教育を担う教育現場の支援側が抱える課題や、取り組みの中での難しさについても共有させていただきたいと思っております。

本日のオープンフォーラムは、3名のパネリストに学校現場の代表として、もう3名のパネリストには、教育を支援する立場からご発言をいただき、『震災の伝承、防災の未来、災害に強い地域づくりに向けた教育の役割』について、ご意見を伺ってまいります。そして流れですが、まずはパネリストのみなさまに順番にプレゼンをいただき、最後に総合討論とさせていただきます。よろしくお願いたします。それでは森本先生よろしくお願いたします。

森本：岩手大学の森本でございます。どうぞよろしくお願いたします。

私は、震災の前年度まで、釜石市立釜石東中学校の教員として、防災教育に取り組んでおりました。震災から7年半が経過し、本市では改めて、「これからどんな防災教育が大切なのか」について、聞き取り調査をしております。そこから明らかになってきた事を少し皆様に情報提供させていただければと思います。

これが岩手県釜石市の場所、ここに写っておりますのは震災前の釜石東中学校の写真になります。次、ちょっと津波の映像が出ます。



この、釜石東中学校のあった場所に、まさに10メートルを超える大津波が押し寄せました。向こうの方に学校の4階や、時計台がかすかに見えます。釜石東中学校と鶴住居小学校は並んでおり、甚大な被害を受けたところでした。学校は、この時放課後で、子ども達は広い校地の中にてんでバラバラにいましたが、放送機器も使えない状況の中、当時の先生方、生徒、児童の皆さんは、声をかけながら、自分で判断をしながら、「津波だ、逃げろ！」と、自ら率先避難をし、本当に間一髪のところを逃げ切ったという状況でした。

この子ども達が、震災前にどんなことをやっていたのか、震災前の防災教育の取り組みになるのですが、まずは学校の大きなテーマとして「自分の命は自分で守る」「助けられる人から助ける人へ」のふたつをあげて取り組んでいました。そして、避訓練はもちろんですが、先ほど中高生の皆さんが発表していたようなフィールドワークや学習もそれぞれやっていました。これが、当時やった内容です。

今回、災害にあった当時の生徒13人にインタビュー調査を行い、震災前に取り組んだ様々な防災教育で、どんな取り組みが一番印象に残っているかを聞いたところ、生徒の皆さんが主体的に、自分たちでやった活動であるということが見えてきました。

例えば、1年の時に作った、てんでんこレンジャーのDVD、地域のためにやった防災ボランティアのDVD、地域のためにやった防災ボランティアのDVD、小学校時代に群馬大学の先生の講演会で防災マップづくりをやったこと、安否札を作ったこと、津波の高さや速さを体感する学習、

などなどです。

また、どうしてこういった学習が印象に残ったのかを質問すると、大きく6点が上がりました。まず、これは自分たちの問題なんだ、と興味・関心を持った。将来、助けられるだけじゃなくて、助ける人になるんだ、という目標が自分の中にあった。自分で考える、自分たちで調べる、すると印象に残る。学習経験のつながりと言っていますが、小・中学校での学習がつながり、知識が深まった。家族と話し合ったことや、地域の人たちとのつながりを自分たちの学習につなげて行ったこと。地域の人達から褒められ、とても嬉しかった、達成感を持ったというのがあります。そして、避難訓練のように、繰り返し繰り返し学習・経験をした。先生たちが熱心にやっていた。これはまさに、大人の姿勢が問われるところです。

さらに、震災を経験して、改めてどんな防災教育が大切だと思うかですが、事実や現実を実感・体感できる学びを通し、知識と融合していくこと、そして、自ら主体的に学習し、それを家庭や地域で学んでいくことが大切なポイントだとわかってきました。

その理由について多くの生徒から聞かれたのが「気がついたら体が動いていた」ということです。このことから、訓練で体が覚えているということも、すごく大事だと思いました。また、防災教育で学んだことや避難訓練が僕の中で繋がってとても現実感があった。だからあの時、たかをくくらないで避難することができたという生徒の意見もありました。生き抜くための学習とは、こういうことなんだと、ここからわかります。



また、家庭においても、家族の信頼関係がなにより重要だということもわかってきました。中学1年のある生徒は、フィールドワークで「津波でんでんこ」という言葉から、警報が出たら、いくら家族が心配でも戻ってはいけないという教訓を学びました。その生徒は、大事な家族を守るためにどうすればいいのか深く考え、家族会議を開くことにしました。いざという時の避難経路を確認し、その生徒は、家族に向かってこう言ったそうです。「いざっていう時、もし私が学校にいたら、お父さんはお父さんで逃げてね。お母さんはお母さんで逃げて。決して私を迎えに来ないでね。私は私で逃げるから。」まさに3月11日の地震で、お父さんが会社から家族を迎えに行こうとした矢先、子どもの言葉を思い出し、行くのを止まった。迎えに行っていれば、行き先は先ほどの津波の映像のあるところなので、自分の命もどうなったかわからない、ということをおっしゃっていました。

現在、釜石東中学校高は、震災から7年経って、山を削った高台によりやく移り、今年の9月に防災学習会を実施しました。当時避難した中学生は、現在は大学生。中学3年生が当時小3です。この学習会は、あの時、手を繋いで一緒に逃げた小学校1年生と、中学校3年生が再会し、先輩たちにいろんな話を聞くというものです。震災を経験した大学生は現在の中学生から、中学生でもできる支援活動について訊ねられると、「中学生だからこそ伝わりやすいことがある。地域に出て、関わりを深め、今必要なことを聞いてぜひ活動してほしい」など体験を交えながら答えていました。その後、小中合同の防災訓練も実施しました。

後半で話題提供する予定ですが、地域の方々による防災プログラム作りについてなど、地域に学ぶ防災教育についてもお話しします。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

佐藤健：森本先生、本当に短い時間でポイントを絞ってお話しいただき、ありがとうございました。続きまして佐藤公治先生のご発表になります。

佐藤公治：はい、歌津中学校の佐藤公治と申します。よろしくお願ひいたします。ご存知のように、歌津中学校は南三陸町にございます。他県からおいでになると、分からないかなと思いますので。南三陸町は、歌津地区と志津川地区と二つの町が合併してできた町でして、今現在は、歌津地区に歌津中学校、志津川地区に志津川中学校と、一町に二つの中学校がございます。これは、震災の津波が来た5時頃の写真でございます。そして、平成24年度、中学校がまだこういう状況の時から、今までの防災教育を変えて、このようなことをやっております。

消防署にご協力いただきまして、平成24年から、この規律訓練というのをやっております。あとは、救急救命法訓練、どこの学校でも防災教育に熱心な学校では行われていることだと思います。また、帰宅訓練というのもやりました。この後、お話し申し上げますが、うちの学校の特徴は、避難所運営訓練ということで、生徒が主体的に取り組むという形で、役割分担を一切決めず、生徒だけで避難所運営訓練をやります。そのために、こういった炊き出しや穴掘り訓練をします。穴掘りは、仮設トイレを作ったり、生ゴミ等の埋却処理、そういうことのためにだったりします。このようにいろんなスキルを学んでおります。



これは、うちの学校の特徴的な訓練で、瓦礫撤去訓練です。道路に瓦礫があって、それを被災者が黙って見ているのではなくて、被災者であっても、たとえばスコップ一つであっても、被災直後から前を向いて、動き始めてほしいという願いを持って、こういう訓練もやっております。1クラス2トンの土砂を積んだダンプを私が運転し、校庭の舗装路、アスファルトのところに、土砂をガーッと投げ入れるんですね。そして、その2トンの土砂を1クラス30人の生徒が、スコップとか、道具を使って、ダンプに積み込みます。だいたい30分ぐらいで積み込みますね。最初は嫌々ながらに始まるんですけども、子ども達もやっているうちに面白くなって、他のクラスよりも早くやろうと頑張ってやったりします。

あとは炊き出し訓練。これは、自宅避難者の家族という想定で5〜6人ぐらいの生徒がひとつの班を作ります。あるのは、流れて来た鍋ひとつという想定で、最初にご飯を炊いて、ご飯をおにぎりとして取っておき、同じ鍋を使って豚汁を作ったり、というようなことをしています。これらの訓練を大体1学期の前半に、地域の方や消防署などを中心に、ご支援をいただいてやりました。2学期、第2回目の避難運営訓練を、24年度の9月17日に行いました。流れですが、まず朝7時半に、避難訓練アナウンスが歌津地区に流れます。地震が発生し、津波が想定されるので、自宅にいる生徒たちは、まず自分の家の近くの高台に避難します。その後、町を津波が襲来し、時間想定としてはだいぶ経ち、落ち着いた頃（これはもしかしたら1日〜2日ぐらい経たないといけないかもしれ

ませんけれども）自分の家にも支援物資も何も届かないという状況のため、まず、この地区で一番大きい避難所である歌津中学校に集まり、8時ぐらいからライフラインが途絶した状況で生活を成り立たせるための訓練を行います。実際は、それぞれ近くの避難所に集まることにはなると思うんですけども、この時は「中学生で避難所運営訓練を行う」ということが目的ですので、歌津中学校に全員集まります。また、その際、徒歩で集まることにします。徒歩で集まる時には、やはり津波警報が解除になったとはいえ危険なので、いつもとは違う高台の山の中を歩いて歌津中学校を目指します。教員が前の日に災害想定で色んな所に行って、地域を見ながら避難所に情報を集めたりもします。

また、生徒は40歳か50歳の大人であるという設定にします。中学生が中学生の訓練をするのではありません。とにかく全部大人という風に扱います。電気、ガス、水道は全部止めます。一応、校舎の屋上にある貯水槽の水は使えますよという設定だけど、残りのみでポンプアップはしないということを生徒にも、事前に話をしておきます。役割分担等は先ほどもお話した通り、一切しません。自分の判断で行動するというにします。校長先生、教頭先生、養護教諭、技師は、専門の役割があるので、当日も同じ役割で活動します。それ以外の教員、または訓練に参加する大人は全部避難者、避難民として扱います。学校の資機材等は全部解放し、好きなように使っていいよと話をしておきます。そういう中で訓練を行います。まあ、中学生ですのでちょっとヒントカードを体育館の中に貼っておいたりなんかします。それを参考に、生徒は自分で役割を見つけていきます。まずは、避難者の人数の把握ですとかですね。これは、伊里前地区の避難者を把握するために職員室から付箋紙をもらってきて、それに名前を書いてもらい、人数把握をしたり、というようなことをこの生徒はやっています。避難所運営本部ですが、特に何も決めませんので、この写真は、この女の子たちが、この男の子に「あんだ、やらいん！（あなたがやりなさい）」と言ってですね。「はい、わかり

ました」という風に。野球部の子なんですけど、特に生徒会長でもなんでもありませんし、でも彼は、男の子も女の子にも非常に信用があるんですね。彼が言うと、ああ、じゃあそうしようか、というふうに合意形成ができるような、そういう子なんです。そういうことも非常に大事だなと、生徒を見ていて思いました。



あと、先ほどありましたけれども、このように、避難の様子を地図に落とし、浸水域を明らかにしたりですね。これは、救護所を開設して、色々な怪我をした方を想定してやってもらっています。またこれはトイレ用水としての水を確保する様子です。また、私たちは知らなかったんですが、野球部の子ども達が避難所にあったポリタンクをリヤカーに積んで、そこから4km離れたところにある湧き水から、200リットルの水をポリタンクに汲んで戻ってきました。彼らは避難所にいる時から、この湧き水を知っていたようです。こうして生徒が自分で役割を見つけて、真面目に対応してやっております。

このように、大事なことは災害後の役割を意識させることによって、まずあなたは発災後生き抜かなければならない、これをやらないと、被災後避難しても何もできないわけですから、そこを意識させる。そういうことによって子どもたちの命を守るということをやっています。

うちの学校は、平成24年度に、少年防災クラブを結成いたしました。これが派生いたしました、昨年度、私は志津川中学校にいましたが、今、南三陸町内のすべての幼・小・中・高には幼年消防クラブ、少年消防クラブがあり、全部の校種に

防災クラブがあるところまで、発展しました。また、このような活動を成り立たせるために、防災教育・教育者会議というものを組織しております。以上にしたいと思います。ありがとうございました。

佐藤健：佐藤公治先生ありがとうございました。公治先生ご自身が志津川ご出身で、地元非常に愛着を持たれている先生です。

それでは引き続きまして吉川先生、お願いいたします。

吉川：よろしくお願ひ致します。先ほど紹介いただきました、福島県飯館村立草野・飯樋・白石という三校の、珍しい三校合同の校長でございます。たぶん皆さんと違って、放射線に関わることについてのお話が多くなると思っています。

飯館村をちょっと知ってもらうために、まず学校の、村の現状をお話しておかないと、どういう状況なのかということが分からないと思います。私、福島市に住んでおりますけれども、飯館村はこちら、そして、原子力発電所があったのはここです。

3月まで、我々が仮設校舎としていたのは、この隣の町になります。これを、皆さんがご存知の線量計で例えると、ここが福島市です。で、飯館村、ここが原子力発電所です。ご覧の通り、あの時、原子力発電所災害のため、風が飯館村の方、福島市の方に流れましたので、従って、避難を余儀なくされたというのが飯館村の現状です。



まだ飯館村でも、南方は避難指示が解除されていない地域があります。下の長泥地区というのがそ

うです。ここが草野小学校、そして飯樋小学校、そして白石小学校として、校舎は使われておりませんが、まだこのように存在しております。そしてこの隣、だいたいこの辺に川俣の仮設小学校、このようなプレハブの校舎がございました。このように、大きなプレハブの校舎、そして幼稚園のほうは、福島市飯野町の方にこのような仮設園舎があって、3月までこちらの方で学習をしていました。

ざっと概要を説明しますと、村内に3小学校がありまして、140年以上の歴史があります。しかしながら東日本大震災で全村避難を余儀なくされ、1年間は川俣中学校に間借りをしました。その後、川俣の仮設校舎、先ほどの校舎で再開し、3校別々に体制がスタートしました。当時、校長は3人おりましたが、26年には校長一人のスタート、ただし教頭は3名今もおります。全学年、3校合同での授業が28年度に実施されて、この3月に川俣の仮設校舎が閉校、そして4月から村で学校再開をすることができました。

平成30年の状況としましては、児童数が3校合わせて33名です。園・小・中合わせますと、104名。小・中同一の校舎で、こども園が隣接しています。センターもそうです。赤字で書いているのがちょっと特徴的なところで、室内プールがやっと完成して、昨年度までは川俣の他の学校のプールを借りていました。それから、ここも特筆すべきところなんですが、村内から通う子どもは8名～9名のみで、それ以外のこども達は、福島市や川俣、あるいは近隣からバス11台で来ております。これは園・小・中を合わせてです。そして三校の合同体制職員が24名、教頭3名おります。

多くの支援、事業を未だに続けていただいております。注目されていますので、メディアの報道も多数ございます。昨年度から今年にかけても、このように特徴的な芸術教育でありますとか、ダンスの公演、さまざまなことがなされる中で、3月に閉校式を迎えました。

昨年の3月に村自体が避難指示解除です。ですから、まだ村人が住み始めて、1年ちょっとです。そして、ようやくこの7月に7年ぶりに村内

で学校が再開しました。再開したのはこちら、村役場の所の向かい、真ん中になります。非常に新しい校舎、国・県の補助を受けてできています。左側が小・中学校、右側がこども園・保育所と幼稚園が合わさったものができました。

4月1日には開園、開講式を迎えることができ、今度は合同で子ども達が入学式、そして避難訓練。こちらも小・中・合同で、中学生が小学生を引率したり、色々な想定でやることができました。運動会なども園・小・中合同でやっています。給食センターが6月にできましたので、こちらでも小・中学生合同で食べています。また、これですね。待望のプール。こちらのプールは、ろ過をすると飲み水に変わるということで、防災拠点になるようなプールです。もしも、何かの災害時は、体育館含めて待機できる、ということです。夏に全てが完成して、PTAの夏祭りなども行ったところですよ。

「震災の伝承と防災の未来」の本テーマに関わり、少し述べさせていただきます。教育目標、これも大変珍しいと思うんですが、園と小と中、合わせて「より良い未来を自分たちの力で作ることができる子ども」。つまり、7年間村に住むことができませんでしたので、子どもたちは未来を作っていく、こういうことを掲げております。本防災フォーラムの中にも「未来」という言葉がたくさん出てきますが、本当にみんなで未来を作っていくところですよ。

それからコミュニティスクールの形式もとっております。月に一度、学校運営協議会というものをしております。村の行事について話し合っているところですよ。

震災の伝承という点から、まあ、伝承ということ意識してやってるわけではないんですが、大切にしていることをお話ししたいと思います。例えば仮設校舎の時には、村の中には入れませんでしたので、実際の村の様子は、子ども達は見に行っていません。そのため、子どもたちにはこのように「バーチャルリアリティ授業」ということで、ドローンを使って村を詳しく撮影したのを見えています。それから、昨年度仮設校舎にいる時

に、冒頭で紹介した三つの学校に、初めて足を踏み入れました。プレハブの校舎とは違って、普段はどうしても足音が響いたりとか、そういう中での生活ですけれども、「あ！階段ってこういうふうに…」いわゆる鉄筋ですよ、そういうのでしっかり出来てるんだということも感動でした。ただ、バスでの移動中は、このようにプレコンバック、いわゆる除染の土壌がある中、バスで通って行くことになります。このようなところも、飯館村にはたくさんございます。こういったものを脇目に見ながら、昨年度、学校の中を見ました。よく見ると奥の方の鉢植え、これは3.11のまま、まだ置かれたままです。黒板なんかも、学校の中には、まだあの時のまま残っています。こういうものを見ながら、まだ、飯館は現在進行形なんだ、ということ子どもたちは気が付いていくわけです。

放射線教育、放射線学習としましては、環境創造センターが三春町にあります。こちらでは色々な実験やアーカイブから学習できるんですが、この様子は、遮蔽機の実験をしているところです。村のプレコンバックは、近づかなければ、そして遮断されていればどのように安全であるのか、どういった数値だと危険なのかということも学んでいます。それから、低学年から放射線の学習を、福島県内全ての学校でやっております。知識理解とともに、放射線は普段から身の回りにあるんだよという「放射線論」も、福島県の授業研究会で、たくさんやっております。ただ単に知識理解だけではなくて、自分が1年生の時と6年生の時、どんなふうに福島県の線量が変わっているのか、なんていうことも調べています。これがその時の様子です。

3.11の追悼集会などでは、校長講話として、このように一年生は0歳だったわけですから、やはり説明しないとわからないと思うのです。そのため、丁寧に、この辺は、被害について、何が起こったのかを映像を使いながら行っています。映像を使うことは大丈夫ですか、なんていう心配の声もあったんですが、やはり教えなければわからないのかな、ということで教えました。プラス、津波により原発が爆発した、ということもお話した

ところですよ。



さて、最後に飯館の未来に向けて、ということ。まずは帰って来たばかりですので、村内での活動を大切にしています。ただ、村内での活動は、実は線量を測っていかないといけない。つまり、見えますかね。右側の方は0.43、つまり0.23より高い数値になっています。ですが室内は0.08ですよ。こういうこともきちんと保護者に伝えながらやっております。リスクコミュニケーションという言葉もありますけれども、やはりそういうことも伝え上で、我々は子どもたちの安全を守っていかねばならない。それを覚悟した上で、このように村に戻ってきて、今回、消防署を訪問したり、神社や、そして田植え、非常に難しかったんですが、村内で線量を測りながら実施することができました。先日、稲刈りも無事に行ったようです。

それから、視察団とか、訪問者がいっぱい来られますので、世界の記者に飯館の元気をアピールしていくということで中学生の田植え踊り、こういったものを発表したり、もともと交流があった団体さんにも飯館の状況を積極的に発信しています。鹿児島県和泉市とも交流いただいていますので、その市が来た時も同じような活動をしました。

最後に自分ができることを考えていくということで、村の未来を考える、そして支援される側から支援する側へということで、今、意識しています。総合的な学習時間を使って未来を考える、その上でぶつかるのが放射線のことです。どうして放射線について学習するのかという根本的な課題に真正面からぶつかって、学習が始まっていると

ころです。そして西日本豪雨で災害を体験した人たちに、募金活動であるとか、自分たちに何かできることがないかということで、給食の時間など、6年生がアピールしているところです。このように飯館村は、これからも頑張っていくしますので、また応援よろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

佐藤健：吉川先生ありがとうございました。ここからは学校の外から教育を支援する側のお立場でお話を伺います。それでは、大内さんお願い致します。

大内：地域防災リーダー大内です。よろしくお願いたします。震災の教訓の一つとして、仙台市では地域防災リーダーを養成しました。そして、その活動は地域に根ざして活動を展開しています。

東日本大震災、あれから7年が経ちました。これは混乱の最中、東日本大震災の2週間後、私たちの地域の高砂小学校で行われた卒業式です。ここは避難所であります。避難してきた方々と地域で支えた、手作りの、本当に心温まるような卒業式でした。子どもたち、ポップコーンを手にしていますが、あれは私たち福住町で役員が作ったポップコーンです。この子達も19歳になっています。この日のことはきっと一生忘れないと思います。

その後、私は小学校の校長先生の依頼で、当時小学校1年生だった子ども達が、小学校6年生になり卒業する時、防災の講話をしました。ここで災害が起きたら、学校にいる間はみんなは先生方に守ってもらえるけれど、一歩外に出たら自分の命は自分で守るんだよ、というお話をしています。そのためには、じゃあ、どうしたらいいか。普段から、避難経路、それからどこに逃げたらいいか、学校に戻るのかを、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんと普段から話していてね、ということ伝えてあります。



これは、津波水害を想定した避難訓練です。私たちの地域はすごく広い地域なんですけど、32年前に大水害が起きた地域でもあって、そのための津波水害を想定した避難訓練を行っております。そして3年前、関東・宮城集中豪雨でやはり道路が冠水したり、大変な被害が出ました。167名が小学校に避難してきたんですが、場所はこの通り、体育館ではありません。

学校の先生は、校長先生も、2年、3年で変わられるんですね。でも、私達地域ってそのままなんです。変わらないんです。先生方は、地域の情報がぜんぜんないことが多いので、私は校長先生が変わる度に、「実は、ここは30年前にとっても甚大な被害が出て、全てが海のようになった地域です。その当時体育館は浸水しました。この小学校も立て直してはあるんですが、同じ位置にあります。」ということを必ず伝えております。そのため、学校と地域の私達、そしてSBL(仙台地域防災リーダーの略称)と避難所を立ち上げたときも、このように体育館の電気をつけず、校舎の3階、4階を避難場所として、一緒に避難所を開設しました。

そしてその後も、校長先生と私は相談しました。小学校の備蓄倉庫って一階にあるんですね。宮城・集中豪雨の時には浸水しませんでしたけど、やはりこれからのこと考えて2階に移すことにしました。平日、授業中だったので、校長先生、保健室の先生、それから町内会長さんや私たちで引越しをしました。このように、地域の災害の歴史を根気よく学校に伝えていく。また、学校の先生方が変わられるたびに、必ずお伝えするように

しています。

これは、夏の講座です。夏休み中に防災講座を開いています。今年は、このハザードマップ、最新式のものをご機管理室の方から頂いて、子どもたちに、自分の住んでいるところはどこか、広範囲にわたって浸水区域なんだよ、と。その中に小学校もあるから、このこと、家に帰ったら、家族、お父さん・お母さんに知らせてねと。もう間に合わないの、子ども達から保護者の方に伝えていくという方法をとっています。

そして右下、サバイバル飯ですね。防災とか減災って、子ども達に言っても、なかなか楽しくないと目を向けてくれないということもあります。空き缶を利用してご飯を炊くなど、そうやって一緒に防災減災を学んでいます。

学校と地域が連携した防災訓練ということで、震災の前の年から、中学校の授業の一環として防災訓練を行っています。今、災害復興住宅が増えて14町内にあるんですけども、まず、中学生が登校します。そして一斉に住んでいる地域に、担当の先生と一緒に帰り、それぞれが地域の人と一緒に防災訓練を行っています。同じ日に14町内が一斉に行くので、担当の署の消防の方はあちこち行かなくてはならず大変なんです。こうやって3年間、防災訓練を学んだ子どもたちは、1年生の時と3年生の時で全く考えが変わってきます。1年生の時には戸惑っていたのが、3年生になると、自分達は地域で何ができるのか、こういうこともあいうこともできるんじゃないか、という答えが返ってくるようになります。そして、私も防災訓練の時に必ず子ども達を集めて言うことは、「あなた達は今、教えてもらう立場だけれど、30年後、40年後には、率先して避難行動し、避難住民を助けたり、避難所の開設をしたりしていると思う。だけど、またあいつた大災害がきたら、絶対に生き残ること。生き残れば人を助けることができるからね。」と話しています。そして、3年間こうやって学んだことは、未来のまちづくりにも繋がっていきます。でも、そのためには、やはり地域の大人の大人たちが、防災と減災に真剣に取り組んでいる姿を見せていかなければならない

と思っています。私も、これからも防災・減災の活動を、地道に進めていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

佐藤健：大内さん、ありがとうございました。大内さんのお話の中にもありましたが、SBLと仰っておられたのは、仙台市地域防災リーダーの愛称です。今日も会場に、そのSBLの方がたくさんいらっしやると思います。はい、では続きまして伊勢さんお願いいたします。

伊勢：はい。みなさん、こんにちは。NPO 法人まなびのたねネットワークで代表をしております伊勢と申します。発表させていただきます。

まず、NPO 法人まなびのたねネットワークは何をしているかと申しますと、活動の目的が、学校教育支援と社会教育支援を通じた青少年育成と、市民が育つ地域社会づくりに寄与する、ということを目指して活動しております。学校教育と、社会教育両方のフィールドで関わらせて頂いておりますが、分かりにくいですね。よく、本当に何やってんのとか、いろんなことやってるね、という風に言われるんですけども。資料のこのピンクとかオレンジの丸が、私たちがやらせて頂いている取り組みです。私の中では一貫して、真ん中に「人材育成」と書かせていただいておりますが、どんな切り口であっても、大事なのは「主体的な人を育てる」ということだと感じています。一人一人が自分の未来を切り開いていくために、まずは自分ごとに考え、そして判断し、行動できるような人を、どうやったら育てられるのか。本当にそこに尽きるなと思ってやっております。

その時に、学校であれば先生、そして社会教育という現場では教育委員会さんとか、私たちが主催でやるということもありますが、いろんな団体さん達と一緒に、「何のために？」を共有し、子どもから大人まで、その人達一人一人が動き出すためにはどうしたらいいか、についてアイデアを出し合いながら、一緒に学び合いの場を作るということを大事にやってくる団体です。

そして、その活動始めてもう10年が経ちます。震災の前から、いろんなところで関わらせて頂いております。うちの団体は、防災教育を専門でやっているわけではないんです。なので、他の先生方と違い、防災だからこれをする、というのではなくて、一人一人がどう育てばいいのかというのを大前提にしております。私たちはキャリア教育が専門ですので、一人一人がどういう生き方をするのか、学び方、働き方をするのかという視点で、いろんなプログラムを組み立てています。その中に防災教育が入ってきた時に、防災教育とキャリア教育を掛け合わせて、お互い学びあえるような場を作っている、という団体でございます。そして個人的には、震災の時はNPOの活動をしながら、仙台駅に近い小学校で3年間、震災の直後まで、そして震災を挟んで2年間は、私の母校である大学、そして昨年度から、石巻市にある女子高で、ずっとコーディネーターをさせていただいております。なので、学校の中に入って、先生方と常に授業をつくるということをさせていただいている立場です。そういった意味で役割として、教育のファシリテーターとキャリア教育コーディネーター、先生方や、教育委員会からいろいろな相談を受けますので、コンサルタント的な立場・役割、それを作り出す、お金も含めて、そういう総合プロデューサー的な役割となっているのかなと思っております。



そうしたところで、この震災後、どんな取り組みを行ってきたかと言うと、一つは先ほど発表にもありましたが、浦戸諸島ですね。震災の前に、牡蠣や海苔の養殖体験を、漁師さんと一緒にやっ

てきた経緯がありまして、浦戸諸島の桂島と野々島の方で、防災ワークショップを今もやらせていただいております。これは社会教育の方ですね。それはなぜかと言うと避難所の中に支援に入らせて頂いた時に、高齢者が多い、いわゆる限界集落とも言われているような島なんですけど、犠牲者が一人も出ず、動けなかった高齢者も含めて全員が助かっている。その背景を考えた時、地域のつながりが見えてきました。そこから私たちは学ぶことがあるのではないかと、ということで組み立てたのが、この防災ワークショップです。小学生と、兵庫県立大学とコラボをして1泊2日のキャンプを行いました。メインが、自分で判断して逃げるという体験。そして命が助かったら次は生き延びるために、まずは食べるということ。そして、当時の様子がどうであったかを、地域の方から聞くということ。そして、考えて、行動に結びつける、そういうプログラムを考えて、野々島で、塩竈市教育委員会さんと一緒に、社会教育の一環でやらせていただいております。これは親子イベントになっておりますので、親子で学ぶという場を作っています。ここで大事にしてるのは、子ども達同士が体験を通して考え、話し合い、自分達なりに答えを出し、互いに学び合うということです。

そして、学校教育のサポートということで二つ紹介したいんですが、一つは、東京の私立中学校のいわゆる修学旅行で、プロジェクトツアーというものをやっています。「東日本大震災から学ぶ」ということで、被災地に来た時の4日間の企画とコーディネートを行っております。一貫して自分の命を守る、そして地域の人たちがどうやって共助をしてきたかということを知り、そして、中学生達が産業からの視点であるとか、多様な面から学べるようなプログラムを作っています。このように、体験活動も入れながら行っています。

そして小学校では、北六番丁小学校さんに震災前から関わらせて頂いております。ここは、都市型防災教育のモデル校になっておりましたが、その当時の先生方からのご相談が「防災教育とまちづくりが繋がらない」という話でした。そこで子ども達が考えたのが、地域貢献イベントをやると

いうことで、最終的にこの“わわわフェスティバル”をやるということになっていきました。初年度は21の地域の団体を学校にお呼びして、その団体をまず子どもたちが知るという目的です。今年度は5年目になっておりますので、地域の人にブースを出してもらい、子ども達は全員、授業の一環としていろんな団体さんを訪問して、何をやっているかを聞き、顔が見える関係をつくっております。その中で5年生の取り組みであったり、6年生の取り組み、消防団の取り組み、社会福祉協議会さんの取り組みなどもやっております。この写真は子どもの発案で、集まった200人全員でマイムマイムを踊っているという写真です。そういう子どもの発案がありました。

先生に相談頂いた時に、私が小学生に津波の授業をやらせていただいたことがあります。ご紹介だけしたいと思います。東日本大震災があって、発生直後、自分を守ることを自助といい、そして、そのあと、みんなで広く助け合う、それが共助と公助につながっていくとい話で、今は時間軸で言うと、もう次の災害に備えているタイミングですよ、と言う時間軸でのお話、じゃあ、まちづくりってどんなだろうね、と言った時に、まちづくりとは自分たちがよりよいを地域にすることですよという話をしています。

じゃあ、そういうことやっている団体ってたくさんあるよね。今回、皆がやるのは、防災を通して、よりよい地域を作ろうということをやっている。じゃあそういう活動している団体がたくさんあるよねということで、小学生でもわかりやすくなるような図を示しています。その団体さん達に来てもらって、先ほどのわわわフェスティバルにつながったということです。なのでNPOの立場としては、先生方がこういうことしたいなとか、子どもたちをこういう風に育てたいな、というところをサポートする、そして一緒に授業を作らせていただいているというのが、今私どもの団体の活動としてあげられるかなと思ってご紹介させて頂きました。ありがとうございました。

佐藤健：伊勢さんありがとうございました。それ

では最後になります。桜井先生、準備のほうお願いします。

桜井：はい。ここには大学の先生がたくさんおられるかと思しますので私の方はできるだけ簡潔に、そしてあくまでも私に関わっている事例ということで大学研究者の役割をご説明をさせていただきたいと思います。いろんな先生がいらっしゃるかと思しますので、あくまでも一つの事例ということでお聞きいただければ幸いです。

私は、震災以来、石巻市の災害復興防災教育の方に関わらせていただいております。大学の役割ってなんだ、ということでお題を頂きましたので、三つ紹介させていただければと思います。

まず一つは、やはり大学の研修研究者としてモデルを開発する、あるいは社会実装するということが研究者として日々常に聞かされていることです。私たちの場合は、復興防災マップづくりの開発を続けております。防災の世界では、まちづくりですか、単なる危険安全マップづくりがよく知られている手法ですが、単なる危険安全マップではなくて、それを復興期にあてはめて、地域に根ざしたマップ作りというのは何なのかということ、この7年半ずっと考えてきております。

そして、モデルということで大事なことは、一校をやって終わりということではなくて、現地に根付いて、より多くの学校に取り組んでいただけるような一般的な取り組みになるにはどうしたらいいかと考えてやっております。2012年度に一校が開始した復興マップ作りですが、2018年度までに16の小中学校が実践校として、今、取り組んでおります。そして年月の経過とともに復興から防災へと重点を置く、7年半の経過を見て成長してきております。ここに出しているのは2012年度、2013年度ですね、鹿妻小学校の復興マップの一例になります。それから、そのモデルということで、2016年度からは地図の活用による、地域に根ざした復興防災マップづくりの開発に展開しております。今日の中学生、桃生中学校の中学生が発表してくださったあれが、まさにひとつの中学校での展開事例という形になります。異なる地域性でも

この浸水地形図、そして治水地形分類図を活用して、自分達の地域がどのような災害を受けやすい地域なのか、そして過去にどのような災害の歴史があったのかということを読んで、自分たちの地域を観察して、そして学習を深めていくと言うプログラムに発展しております。そして先ほどの桃生中学校の事例にありましたが、石巻市は津波で大きな被害を受けた地域ですけれども、沿岸部だけでなく内陸部に発展をするにつれて、洪水土砂災害ということでマルチハザード対応が可能になっております。



大学の役割の②ということで、ここからは他の一般的な、一般的な研究者はいないと思うんですけども、大学の研究者の方とは若干違うところです。実践を支援するということです。今まで、いくつもの学校の実践を支援させていただいた経緯を踏まえて、教員用手引きというものを開発しております。こちらが教員用手引きの表紙になっておりますが、これは東北大学災害研の防災教育国際協働センターのホームページで見ることができます。手引きの内容は、基本的な考え方、そして地域に根ざしたプログラムですから、どうやって自分たちの学校の状況に合わせて展開できるかということで、事項化ステップを示しております。

そして先生方にとってなくてはならないのが指導案です。この指導案を例示しております、そして、どの学校でどの事例があったかを紹介し、マークシート類を共有しております。この手引きは、今、石巻市の教員の方々への支援や研修で活用しております。

そして大学の役割③、これはさらに例が少なく

なってくるかと思いますが、私共、協働を推進しております。ずっと先ほどから「私共」と言っておりますがこの石巻の復興防災マップは私だけの力でやっているものではありません。まず研究者の間では異なる専門分野の研究者間の協働が進んでおります。地震工学、自然地理、私たちは国際協力開発の専門でございましたけれども、異なる専門家が一緒になって、何ができるかを考えていく。そして大学教員と学校の現職の教員、そして教員経験者の方と協働することで実践の支援というものを実現しています。そしてさらにNPOや石巻市の教育委員会、学校防災推進会との連携をしてモデルをどのような形で普及できるかということを考えており、学校と地域の連携の橋渡しをしております。

今お話しした三つのことを通じて、どういう役割を果たしているかをもう一度まとめると、重要なポイントは「誰のための支援をしているのか」ということです。オーナーシップというものは非常に重要です。教員、児童、生徒が主体的に取り組むために、大学は何をできるのかということ。そして支援と、支援後の持続可能性ということでは、手引や指導案等をお示しすることで、先生方が、よりやりやすくなるための支援を考えております。そして最後は先ほど申し上げました通り、地図を活用するなど色々な研究者の専門的な見地からどのようにして地域に根ざした教育ができるのかということを考えていっております。

短くするといいましたが、5分が過ぎましたので最後に2枚だけ。

次の討論の参考資料ということでお示しします。震災の伝承ということで、実は私ども小学校4年生、10才を中心に7年近く同じ学校を見ておりますが、2012年に始まった復興マップ作りを始めた学校で、当時10歳だった子は今高校生になっております。そして今年も4年生に対する防災学習を支援しておりますが、その子どもたちは、震災当時は幼稚園に入る前という状況でした。震災からの年月の経過とともに、被災地の子ども達に震災の経験や記憶を踏まえた防災学習をどう展開するのかということは、先ほどからも例に出ており

ますように、震災を経験した子どもと震災のことはあまり覚えてない子どもでも変わってきます。覚えていない子ども達にどう伝承をするのかということで、実は今年度、このような学習をやっております。小学校4年生に地図を活用して、学区の地形、浸水エリアを示した上で、実際に2013年度の子どもたちが復興マップ作りで作った情報をもとに、地域でどの場所に、どれ位の高さの津波が来たのかということをおぼえます。そして、宮城県に伝承サポーター制度で示されているような津波浸水高の標識を使った学習というものが始まってきています。このような形で、震災と復興の記憶に基づく防災学習モデルを最後に開発していくという形で、大学としてはご支援をさせていただいている状態です。どうもありがとうございます。

佐藤健：桜井先生、どうもありがとうございます。それでは照明をつけていただきまして、パネリストの方はもう一度壇上のほうに上がっていただければと思います。

移動していただいている間にアナウンスですけれども、本日ご講演頂きましたスライドにつきましては事前にお配りすることができませんでしたので、パネリストからご提供いただけるものにつきましては、東北大学災害科学国際研究所の防災教育国際協働センターのホームページに、後日、あげさせていただきますので、関心のある方はそこからダウンロードしていただくということでご了承いただければと思います。

それでは、ここから30分ぐらいになりますが、総合討論をさせていただきますので、できるだけ会場の皆様からもご質問やコメントいただく時間も設けたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

それでははじめに、今もいろいろ情報提供いただきましたけれども、復興教育、防災教育、それから福島では放射線・防災・減災教育の実践や展開が今も進められているわけですが、学校現場側から、それを支援する側に対してこういうことをしてもらえるとありがたいですか、ご意見を学

校関係の方にお伺いしたいと思います。森本先生からお願いいたします。

森本：それでは、私は、震災の前年度まで中学校教員で、現在は大学院に、ということで、支援を受ける側と、今の桜井先生からのお話にもありましたが、少し支援する側でもあり、両方の立場から感じたところを3点お話しさせていただければと思います。

一点は、先ほどの皆様の中からもあるんですが、どうしても、「NPOの方に来ていただいて」「ゲストティーチャーに来てもらって」という風にお任せになってしまうんですね。先生が主体的に関わっていかないと、子ども達にも学習が入っていかないの、やっぱり先生と子どもが主体的に学習的に関わっていけるようにしていく必要がある、というのが一つでした。私がゲストティーチャーの時には、できれば、その担任の先生には最初と最後をお願いするとか、TTと一緒に授業をつくっていくという様なスタイルにしています。それは一つの小さい授業もそうですし、もっと長く関わっていく場合には学校が主体的に取り組んで行けるようにしていくのが必要だなあと思っていました。

二点目は、先ほども出ていたんですが、どうしても学校の先生方は転勤で変わります。地域にどういう資源があるのか、どういう団体があるのかっていうのがやはりわからなかったりする。学校がリサーチするのも大事なんですが、地域からのコンタクトがあると学校はやっぱりつながりやすい。ひとつが繋がるとみんなと繋がれる。こういうのがあるといいなというのが二点目でした。

三点目は、学校は地域の学校でもあるので、先ほども大内さんが校長先生に、うちの地域ではこのような災害があるんだということを強くおっしゃっているというお話がありましたが、地域にはこの子どもたちをどう育てるのかという覚悟と決意があると、先生方にもそれが伝わっていくと思うので、そういうのがあるといいなと。すみません、最近感じている三点をご紹介します。ありがとうございました。



佐藤健：はい、ありがとうございました。では佐藤公治先生お願いします。

佐藤公治：はい。先ほどちょっとお話ししましたように、歌津中学校で避難所運営訓練という形の訓練をやっております。私は去年まで志津川中学校に勤務しておりましたので、同じ形の訓練を志津川中学校でもはじめました。そういうことで南三陸町は二つの中学校が同じ形で訓練をしております。そういった中で、地域の支援というか、お世話に熱心な方々が志津川中学校にも歌津中学校にも両方に支援をしてくださって、輪が徐々に広がっていきつつあります。私の発表の中にありましたように、協力者会議という形で、地域の中でキーマンとなるような方を作っていきといえますか、地域にはそういう方が元々いらっしゃるのです、そういった方を学校とつないで、ずっと学校に関わっていただくように、そしてその輪が広がれば、教員が変わっても、誰がどこに行っても、継続的に防災教育が繋がっていくという形です。そもそも、一回目の教育者会議の最初では、「校長先生を教育者会議の議長にはしませんから」とお話をしました。校長先生ではなく、地域の方をお願いをしています。その時は、消防団の団長さんをお願いしたんですね。そして、担当者の私が異動していなくなるかもしれないので、「毎年4月に必ず、今年の避難所運営訓練はどうするんですか、と学校に電話をしてください。議長さんの役割はそれひとつだけです。」という風にお話をし、これまで歌津中学校は継続していたという状況です。去年、志津川中学校でも始まったんですが、

今年、私は移動して歌津中学校に変わりました。その中で、先生方の関わりもまだ1年しか経験がないため、主体的な関わり方がちょっとまだ薄いという状況があって、支援者の方々が歌津中学校においでになって、歌津中学校との違いというのをお話ししたりしました。そういう風な話をしながら、子どもたちと関わりながら、「防災」という看板を掲げてはいますが、私がやりたいことは人づくり、人をつくって行ってそして、地域を作っていくことをやっていきたいと思っています。以上です。

佐藤健：ありがとうございました。では吉川先生お願いします。

吉川：3番目だと話すことがなくなります。

あの、先ほど公治先生もおっしゃったように、学校でやる時は出前授業型じゃないですか。桜井先生が仰っていた様に、やっぱり教師がどう料理するかを考えて協働していかなくちゃならないのかなというのがひとつ。あと、飯館のことでいえば、支援は専門家の支援ということだけではなくて、たとえばこういう音楽教室なども含め、たくさん支援をいただくんですね。そうすると、教育課程の中にどうしても入らないものが多いんです。そうするとやっぱり、選んでいかなくちゃならないと言ったらまあ、畏れ多いですけども。この場合の支援はちょっと違うかもしれないんですけど、いろんな交流、いろんなものを全部受け入れていくと、学校の機能がストップしてしまう、ということことでいえば、先ほどもあったように狙いを共有していく必要がある。飯館を訪ねた人が、交流よりも、飯館の子たちに何かを提供したいって言うんですけれども、今日の中学生が発表で言っていましたが「被災者と呼ばないで」と。そういったことから言っても、当たり前のことを当たり前にやるためにどうしていただいいか、ということと一緒に考えてもらうということが大学の役割、ということにも共感したところです。以上です。

佐藤健：ありがとうございました。教育を支援する

には、単純に一法通行の支援型ではなくて相方向、協働型であるべきだという話がありました。今度は、支援する3人の方からお願いします。そうは言っても、というような関わっている中での課題ですとか難しさですとか、何かそのあたりのお話があれば。大内さんからお願いします。

大内：過去に水害の歴史があるような大変な地域に、生まれて育った子どもたちを、私たちは守らなければいけませんので、防災だけに特化してるわけではありません。登下校の見守りもしていますし、小学校と地域が一体となるように震災前から取り組んでおります。そうしたことで、地域と学校のコミュニケーションがすごく取れてくるのがわかってきました。

私自身も、地域支援のスーパーバイザーや、学校になるべく関わっていくように、また、校長先生が変わられたら、自分から関わるようにしています。今年も3年間、学校にいらした校長先生がお辞めになって、新しい校長先生がいらっしゃいました。私達の方からお話しするのは勇気が要りましたが、気がつけば校長室で2時間ぐらい、この地域のこと、子ども達が今までしてきたことなど、いっぱいお話をしていました。備蓄倉庫の引越しのこともですが、コミュニケーションが取れていると、すぐにいろんな協力をしていただけます。こうした関係を築けた先生方が変わられるとき、とても残念な思いになります。ただ、防災・減災は日常生活だと思っているので、その中から私たちが色々学んでいくことだと思います。これから、もとにかくコミュニケーションを取っていく、ということに努力をしていきたいと思います。

佐藤健：ありがとうございます。では伊勢さん。

伊勢：はい。私は、コーディネーターという立場から発言させていただきたいと思っております。

防災教育を防災強化の視点で進めていくと、間違いなく、地域と学校の連携・協働が必須だというのは誰しもが分かっていることだと思います。ただ、急に、防災をやろうといったところで、良

いきっかけではあるんですけど、たぶん学校の先生方からするとすごく負担が大きいと思うんですね。そういう声も、私は聴く側ではあります。片や、地域の方はどうか。地域の想いがある方達というのは、シニアの方がすごく多い。また、私のような世代になるとPTA活動になっていくので、直接的な保護者という立場だと学校との関係が作りにくい。実際、役員へのなり手がいないという根本的な課題がありますよね。じゃあ、子ども達はどのようなふう育てていくのかと言った時に、やはり、地域の想いのある大人と先生方をどうやって繋げるのかというのが課題だと思っています。そういったことから、仙台市では平成20年度から、そして宮城県の他の自治体の方は平成28年度か29年度かに、地域連携担当者という先生を全ての学校に配置しています。今まで、学校の窓口というと、どうしても教頭先生だったんですけども、それだものすごく負担が大きいということからです。

もう一つはですね、昨年度の4月に社会科教育法が変わりまして、支援について、一方的な支援ではなくて、やはり連携・協働が必要だということで、地域学校協働活動という法律が、社会教育法の中に位置づけられました。じゃ、何が変わるかということ、各教育委員会が地域学校協働活動推進員を委嘱できるようになっています。推進員とは、コーディネーターなんですね。そのコーディネーターを、教育委員会が地域側の方へ委嘱できる体制が整えられるようになってきています。これを、各自治体の教育委員会さんの判断でどうしていくかで、どんどん進むところ、そうでない地域と、温度差が出てくる所かなと思っています。やはり、これからのことを考えると、学校や地域で、こういう繋ぎ役をどういう方が担っていくのか、いかに見つけるかが、学校と地域のつながりがどんどん薄れていってる地域にこそ、必要なことなのではないかなと感じています。以上です。

佐藤健：はい、ありがとうございます。では桜井先生。

桜井：私は、大学の専門家と、現場の教員の先生との間は、おそらく「異文化コミュニケーション」に近いものがあるんじゃないかなという風に、国際協力を背景にしている人間としては思っています。それともう一つは、防災は教科ではないので、どうしてもまだなんらかの支援が必要な分野であるというところがあります。



じゃあ、それを踏まえてどういう風に協働していったらいいのか。実は、学校の現場に入る時に、特に私、教室に入る時、無茶苦茶緊張します。なぜかと言うと、私は教員じゃないからです。私は教員免許を持っていませんし、教員じゃないのに学校の教室に入るのって、すごく緊張します。それは何故か？学校の先生っていうのは教員課程の中で、ちゃんと指導案を書く勉強をされていますし、学習指導要領に基づいて、教科書に基づいて授業を展開されています。そして学校には学校の年間計画というのがあっていろんな行事が全部決まっています。そんな中で、外部の支援者が学校の教室の中に入るって、やはりものすごく緊張して、勇気がいることなんです。なので「異文化コミュニケーション」。特に、あまりたくさん学校の先生がいるので失礼ですが、フレキシブルでない学校の教室の中に入るときに、支援者の役割って何なのかっていうことを、やっぱりもう一度考える必要があって、大学の研究者で言えば、自分たちはこんなプログラムを作ってきたんだけど、学校でやってみてもらえませんか、やらせてください！というように、決して気軽には入れない場所なんだということを、大学の研究者はまず、知るべきじゃないかなと思ったりしま

す。すいません。そして、じゃあどうしたらいいか。先ほど森本先生もありました、そのようにフレキシブルじゃない、がんじがらめになっているところで協働が必要な時にどうしたらいいか。あるいは吉川先生の話にもありました、教育課程にフィットする支援ができるのか、そういうことをすべて学校に任せるんじゃないかって、支援に入る前に、支援する側と学校と一緒に考えて協働する、ここが協働のポイントなんじゃないかなと思います。以上です。

佐藤健：はい。コーディネーターのようにまとめていただいたような感じがありますが。ありがとうございます。

それでは、時間もだいぶ押してきましたけれども、会場から、ご感想、パネリストへのご質問など、何かご発言ある方は挙手をしていただければと思いますが、いかがでしょうか。マイクがまわりますので。

参加者1：本当に、色々ためになる話をありがとうございました。先ほどから、学校側、地域側のいろんな対応についてお話を聞いてると、あくまでも避難所を開設してから、そこで避難場所に集まってからの話を中心になっているように思えます。というのは、私は震災後に避難者として仮設住宅に入っています。地域のいろんなところから集まってきた避難者が住んでいる復興住宅です。そこで、去年もやりましたし、今年も来月に防災訓練を予定しているんですが、住民に話を聞くと、「あれだけ大変な震災を乗り越えてきたんだから、今度はもう何があったって怖くない」という意見と、「もうわざわざ行ってみんなに迷惑かけたくない」という高齢者も多いです。

それと近くの小学校が避難所になっています。私は小学生の子どもはいないんですが、その団地から小学校に行くまでの小学生の通学路が、遠回りしているように感じたので、小学校に聞いたところ、「こちらの道路は雨が降ると水害で歩けなくなるので、ここは通学路として適さない。遠

回りになるけれどもこっちの道路を通ってください。」という話があったんです。防災に目を向けた時に、いざ私たちが避難所である小学校に向かう時、そういう事情を知らない障害者とか車椅子を利用している人は、一番近い道路や大きい道路へと思うんですね。こういうことは地域で取り組んでいかなければいけないことは認識しておりますが、そういう話し合いをする場っていうのもっと、学校なり、地域で共有する時間、機会を持ってないかと思っているんですが、なかなか難しく、その辺をどのように解決していけばいいのかというところを今、考えております。何か参考になるようなことがありましたらお願いします。

佐藤健：わかりました。今のご質問ですと、なんとなく学校と地域の連携、枠組みと話いうことですので、公治先生の教育者会議ですとか、吉川先生のように学校のコミュニティスクールですとか。枠組みはいろんな形があると思うんですけれども、今、何かご発言、アドバイスしていただけることがありましたら。いかがでしょうか。

吉川：はい。今、仰っていることはすごく大事なことだと思います。で、飯館は本当に帰ってきたばかりなので、まだ、地域とのコミュニケーションが取れてない中なのですが、学校連絡協議会という場がひとつありまして、PTA 会長、地域のコーディネーターの方、いろんな人が出ていますので、そこでそういう話題を出して行って、地域に広げていくというのがひとつかなと。コミュニティスクールが無い場合、社会教育の分野でも社会教育委員会といったところもありますので、そういった情報を入れなくちゃならないのかなというのを実感しました。やっぱりあとは、学校の情報は回覧板とかそういったもので知らせていくのも大事なんじゃないかなという風に思いました。ありがとうございます。

佐藤健：よろしいでしょうか。はい。終了後にでもまた意見交換していただければと思います。もう一件くらいお受けしたいと思いますが、いかが

でしょうか。はい、どうぞよろしく申し上げます。

参加者 2：簡単に。西沢と申します。私が考え、感じているのは、今、ますます学校とね、地域が離れつつあると思います。教育委員会、各県、校長先生によっても違うんでしょうけれど、教育委員会と地域とのコミュニケーションができていない、だんだん離れていっているなと感じています。私の地域だと小学校も時間がくると門扉、閉めちゃいますよね。役員の人達は入っているんでしょうけどね。とにかく地域の人とのコミュニケーションっていうのが。児童は休みの時にコミセンで芋煮会やるとかね、そういうことをやったら来るんですが、その時、大体先生はお休みの日なんです。休日の時にやるからね。だから地域とか学校の先生っていうのはだんだん離れつつある。もう嘆かわしい現象だと思いますよ。

佐藤健：はい、ありがとうございます。まさに、それに各地域で取り組んで行かないといけないという応援のメッセージだと伺いました。

だいぶ予定の時間を過ぎてはいるんですけども、今日の感想で結構なので、パネリストの皆さんに短い時間で最後にお一人ずつ少し伺いたいと思います。森本先生からお願いします。

森本：はい。感想になるんですが。震災前に釜石で防災教育をしていた時、津波の警句碑があっても、自分自身もそうでしたが、最初は素通りしてしまう。でもあそこ何が書かれているのか、過去どうだったのかというのが、自分たちが学んでいくと、やっぱり災害に備えなければいけない、やっていかななくてはならないという課題意識を、自分もそうだし、生徒も持ったと思います。これから、もう7年、時間の経過でどうしても風化は起きると思うんですが、世代を超えて伝えていけるのが「教育」なんじゃないかと。その時に、手法、やり方が大事になってくるんですが、教育の持つ意味を私たち自身がもう一度確認すること。そして、地域が学校をつくり、学校が地域を作っていくような相互関係があると思うので、距離を感じ

るという方もいらっしゃいましたが、私たちは、これをもっと縮めていくということが責務、使命だなと、思っております。以上です。ありがとうございます。

佐藤健：ありがとうございます。公治先生、お願いします。

佐藤公治：はい。本当にですね、人と人とのつながり、その総体が地域を作っているという風に思っています。交流活動等、いろいろありますけれども、中学校の場合、本当に学校と家との往復、南三陸町ですと、スクールバスですので、本当に家と学校だけの往復、それと土曜も部活動があったり、あと塾があったりですね。そういう風な中で中学生の周りが形成されているという状況です。実態の中で、地域協働教育の充実とかも求められているのではないかなとっております。以上です。

佐藤健：はい。ありがとうございます。吉川先生、お願いします。

吉川：まず、前半のあの中高生の発表、凄かったですねー。若い力ってすごいなと思いました。こういう人たちが日本を支えていくんだなあというのが一つ。それから、あの、実はこの最後に言おう思っていたのが、先ほどの西沢さんのお話ですが、飯館村にぜひ、小学校においで下さい。ご案内します。隣の隣にいるのが教頭で、今カメラ撮っていますけれども。今ね、非常にいろんなところから視察に来てもらっているんですよ。そういう人はウェルカムで、村長も教育委員会も皆で案内しています。これからそういう、要するに学校ってどういうところかなって知ってもらえるのは大事なことかなと思います。まあ、もちろん学校の事情で、何年か前の池田小学校の事件とか、いろいろありますので、なかなか解放ということにも無理難題はあると思うんですが。皆さん、飯館村にぜひお越しください。ご案内しますので。以上です。

佐藤健：ありがとうございます。では大内さん、お願いします。

大内：今日は中高生の発表を見てパネル展示を回ったんですが、先生方がおっしゃるように戻ってきてから「いやあー、すごいなー！俺たちこれから発表するの、恥ずかしいな。」って皆さんおっしゃっていて。それぐらいパワーがあって、これからの未来を担う子ども達って凄いなあと感じました。あとは、防災・減災って、顔が見える関係が減災に繋がるって、私も言っているんですけど、それだけで減災にはなかなか繋がりませんし、私は地域の立場として、長いスパンがかかると感じています。そしてやっぱり子どもたちを守るためには、学校の先生です。昨日も話して感じたのは、私と学校の先生とは視点が違う。結局、行き着くところは同じなんですけれども、とても面白かったですね。学校の教育、今の先生方がこのように考えている、昨日、今日と学びの場になりました。これからも、長いスパンはかかるけれど地道にやっていきたいと思います。以上です。

佐藤健：ありがとうございます。では、伊勢さんお願いします。



伊勢：はい。まず、前半の中高生の発表が素晴らしいかったということは私も同じです。そこから見えてくるものは何か、といった時、私、今40代ですけれども、私たちが受けてきた教育と、今日の子どもの受けている教育は明らかに違うということなんですよ。それは、地域で学校を何とかしたいと思っている私も含めた大人が、学校教育で受けてきた教育っていうのは、やはり一方通行の、先生から知識を教えてもらおうという教育

だったと思うんです。でも、今の子ども達が、これからの社会を生きるためにどうしたらいいかと言えば、間違いなく、いろんな人と協働していくということなんですね。知識だけではやっていけない。

今までは、学校の先生と地域の人たちが飲み会みたいな場で繋がる機会がありました。そういう場合は、社会が変わってきた今、作りづらくなっている。でも、今、本当に、全部学校にいらるんですよ。全部、学校、学校で、もう学校はパンク状態です。先生方、本当に大変です。先生方は、やってないわけじゃなくてやりすぎてるぐらいで余裕がない。今回は防災ですが、ありとあらゆる「なんとか教育」というものが全部学校にはあって、100以上あると言われてます。そして、増える一方で、削られることはないです。先生を介して子どもたちに今いる状況ですね。そういう状態であるということをもっと認識していただきたいと思っています。

じゃあ私たちは何をしたらいいかと言えば、地域社会を考えた時、一番最初に学校が問題視していることは、やっぱり家庭の教育なんですよ。親子間の関係であるとか、家庭の状況が落ち着かなければ落ち着かないほど、学校での問題というのも発生しやすくなってきます。そこから地域と連携をしようと思ってもその余裕がないということをもっと認識していただきたいと思います。

そのために、私たちは何をすればいいかといえば、やはり対立構造ではなくて、真ん中に子ども達を置いて、どういう子どもを育てるのか、子どもたちがその地域に残って、その地域を担っていくような人をどうやって育てればいいのか、というのを、気がついた人から「先生ちょっと一緒に話しましょう」とか、「こういう場があるんだけど」という風に、まずは一人からスタートできるというのかなと思っています。私は地域も学校を見てきているので、そういった思いでコツコツと現場を作ること、より良くなっていくという地域をつくるために、気づいた大人から一歩踏み出す、そして子どもたちを真ん中にして一緒に地域をつくるメンバーとして協働できたらいいのかな

と思っています。以上です。

佐藤健：はい、ありがとうございます。桜井先生お願いします。

桜井：ありがとうございます。今日は釜石の取り組み、そして歌津の取り組み、飯館村の取り組み、そして中高生の発表を伺わせて頂いて、今日のテーマである「震災の伝承と防災の未来」について改めて感じたのは、やはり伝承と未来というのはセットになっているなど。つまり、東日本大震災から7年半が経つ中で、学校の現場での震災の伝承、そして防災教育というのがどんどん進化しているなどということを改めて色々な事象を通じて学ぶことができました。被災地として色々な経験をされた子どもたち、先生方、地域の方々がいらっしゃるんですけども、これをどうやって役立てて未来につなげていくのかという取り組みこれについて、本当に頭が下がる思いでいっぱいになりました。

そしてもう一つは、子ども達の発表、そして中高生の発表を聞いていて、世代をつなぐということが行われているな、ということを見ました。震災を経験した子どもたちが、そしてよく知らない、覚えてない子ども達に教えて行く機会を作っている、あるいは一緒に学習をするという機会を作っている、あるいはその震災の経験を持った生徒が地域の大人に働きかけて色々な試みをしているということで、この世代を繋ぐというのが伝承と未来の防災を考える上では非常に重要なことだな。そしてそれを繋ぐという意味では、さきほどからお話になっている協働とか、コーディネーションというのが本当に必要で、いろんな形・力が必要となっているということを改めて感じました。

最後に大学の研究者としては、やはり7年半取り組んできたことが、一体どんなふう子ども達の成長や発達にインパクトを与えているのかということちゃんと昇華していかないといけない、ということ胸に戒めた今日になりました。ありがとうございます。

佐藤健：はい、ありがとうございました。それでは私から最後ですが、本当に短くまとめさせていただきます閉めたいと思います。

まずは今日、各パネリストの3.11のあの時の状況から7年半の岩手・宮城・福島の状況から、今でも非常にそれぞれが多様であることを会場の皆様にも改めてご理解頂けたのではないかと思います。そして学校と地域との関係という切り口では、学校と地域の距離を縮めるですとか、一方的な支援ではなく皆様が仰っていたように協働というお話がありましたけれども、それを進めていくにあたっては、今日発表していただいた中高生のように、学ぶ意欲、あるいは地域のために役に立ちたいという子ども達に私たち大人も負けないように、また、学校教育、社会教育ですとか様々な教育の場面に、私たちが、会場の皆様が、上手にこれから関わる、そういう機会を増やしていければいいのではないかなということ、私自身も感じたところです。

はい、それでは予定の時間がだいぶ過ぎてしまいましたが、これでパネルディスカッションを終わらせていただきます。最後にパネリストの皆様には大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

佐藤翔輔：それではこのまま閉会の行事に入らせていただきたいと思います。

閉会の冒頭はですね、先ほど発表されました生徒さんの発表に対しての賞状授与式にさせていただきますと思います。投票いただいた皆様、本当にありがとうございました。かなりたくさんの方に投票いただくことができました、第3位から発表させていただきますというふうに思います。第3位は2校ございます。13票獲られました、石巻西高校、小山様、佐藤様。仙台二華高の古泉様。拍手をお願いいたします。はい、第2位でございます。27票ですね。石巻市立桃生中学校でございます。おめでとうございます。で、第1位です。気仙沼市立の階上中学校さん、54票でした。それでは、今、お名前呼んだ4校の生徒さんはですね、前の方に来ていただいて、これから賞状をお渡し

いたします。

▶賞状授与式



最後に、生徒さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。

ご協力いただきました皆様、まことにありがとうございました。東北大学災害科学国際研究所教授の佐藤健よりご挨拶申し上げます。

佐藤健：主催者のひとつ東北大学災害研の立場で閉会の挨拶をさせていただきます。本日は、日本自然災害学会が中心となって企画させていただきました。オープンフォーラム、約200名の大勢の方にご参加頂きまして本当に有難うございます。本日の中高生の発表、ディスカッションでいろんな情報やヒントですとか、様々な情報ネットワークを得ていただいたものと思いますので、今後の各地域、各学校での防災・減災の活動に役立てていただければと思っております。本日はご参加いただきまして誠にありがとうございました。

佐藤翔輔：以上をもちまして日本自然災害学会第37回学術講演会オープンフォーラムを閉会いたします。本日はご参加頂きまして本当にありがとうございました。